

R. A. SAYCE 「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」  
の検討 (2)

Verification of R. A. Sayce's "Compositorial Practices and the Localization  
of Printed Books, 1530-1800" (2)

福島 知己

FUKUSHIMA Tomomi

一 R. A. SAYCE 「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印  
刷地の特定」 (2)

前号に引き続き R. A. Sayce, "Compositorial Practices and the Localization of Printed Books, 1530-1800," *The Library*, fifth series, 21(1), March 1966 の翻訳を以下に掲げる。今号では第 2 章を扱う。

(ここから翻訳)

2. 本文の折記号に用いられるアルファベット

(i) 小文字アルファベット

16 世紀に印刷された本、およびかなり頻度は低いものの 17 世紀前期に印刷された本では、本文の折記号にまず小文字アルファベットを用い、折記号が 2 巡目に入ったら大文字の A を使うという慣行がしばしば採用されている。ただし 2 巡目では aa を使うこともある (Aa とか AA のようなもつと珍しいやり方もある)。いずれにせよ 16 世紀ではこの慣行は広範に採用されたので、印刷地の特定という目的に照らすと、それほど注目には値しない。しかし、Basle で印刷された本にとりわけ頻繁に見受けられ、1533 年から 1584 年まで数多くの例が見つかる。Zurich で印刷された本に用いられた例も 1 例 (1556 年) ある。Paris で印刷された本 (1512 年-1646 年) や Lyons で印刷された本 (1532 年-1595 年、また 1663 年にも 1 点) でも数多く見られる。フランスの他の地方都市の事例は以下の通り。La Rochelle (1581 年)、Orleans (1604 年)、Tournon (1604 年、1616 年)、Caen (1605 年)。イタリアで印刷された本では Venice (1516 年-67 年)、Bologna (1523 年)、Vicenza (1529 年、3 例)、Cremona (1535 年)、Florence (1550 年、1552 年) で見つかっている。ドイツで印刷された本も同様のパターンである。Wittenberg (1534 年、1553 年)、Frankfurt (1543 年-1613 年)、Hamburg (1592 年)、Strasbourg (1595 年、1604 年)、Ingolstadt (1602 年)、Mainz (1609 年)、Hanau (1610 年)、Cologne (1600 年、1622 年)。調査したかぎり、オランダの本でこの慣行が採用されていることは少ない。せいぜい Leiden (1595 年-1611 年)、Amsterdam (1597 年、1663 年) 程度である。他の散発的な例は Louvain (1550 年)、Saragossa (1555 年)、Coimbra (1564 年)、

London (1551年、1570年)<sup>1</sup>、Uppsala (1697年)がある。最後の例は北方で擬古趣味が残存していた例として、いくらか興味を惹く。

もっと意義のある2つの観察を記しておく。Genevaで印刷された本では、本文の折記号に小文字アルファベットを用いる慣行はさらに17世紀まで続いており、他の都市で印刷された本で見られるよりも多くの例が見つかる。印刷年は1540年から1665年に及ぶ。Antwerpで印刷された本では(さしあたり2巡目のアルファベットの議論を先取りして言えば)、1525年から1634年まで使用例があるが、Plantinによって印刷された本で通例採用されている慣行は、通常の順序を逆にして、本文折記号を大文字のAから始めて、次に小文字のaに進む(それから通常のAaが来る)、というやり方であった。このやり方が採用されている例は1571年から1596年まで見つかり、Leidenで1595年にRaphelengiusによって印刷された1点の本でも採用されている。実はこのやり方が他の都市で知られていなかったわけではないが、多くの例はもっと早い時期のものである。すなわちParis (1519年、1553年、1572年)、Frankfurt (1543年)、Leipzig (1562年、1570年)、Strasbourg (1566年)、Geneva (1621年)で印刷された本に見つかる。最後の例は実際には違うパターンに従っており、A、a、aa、aaaという順序になっている<sup>2</sup>。

小文字アルファベットを本文の折記号に用いるやり方は、イタリアで18世紀、とりわけ世紀末に近づく頃印刷された本で、息を吹き返している。Padua (1737年)、Sassari (1774年)、Rome (1783年)、Venice (1788年)、Naples (1796年)で印刷された本の例がある。それ以外で印刷された紛れもない18世紀の例は、1例である(Frankfurt and Leipzig 1708年)<sup>3</sup>。その他すでに述べたLondonで1725年に印刷されたBoccaccioの本は、わざと擬古趣味に仕立て上げられており、また、なにかの理由で小文字アルファベットが大文字アルファベットと混用されている例もある(Rotterdam 1709年、Leiden 1725年、1742年)。

McKerrowの指摘によれば、16世紀のフランスの本では、小文字のkの代わりにlzが使われることがあったという<sup>4</sup>。調査対象中では実例はParis (1542年、1557年)、Geneva (1551年)の3例しか見つからなかった。

従って本文アルファベットに小文字のアルファベットを使うことは、一般にたいした重要性をもたない。しかし17世紀の中葉に印刷された本でそうなら、Genevaで印刷された本、18世紀に印刷された本でそうなら、イタリアで印刷された本と、推測できそうである。16世紀末に印刷された本で、本文折記号に大文字アルファベットに続いて小文字アルファベットが用いられていれば、Plantinの本であると考えられそうである。

## (ii) 白紙葉にAの折記号を付与するやり方

最初の折記号Aを標題紙の前の白紙葉に付与するやり方は、イングランドのとりわけ17世紀に印刷された本に限られるようである。この観察は、大雑把に調べた結果に主に基づいてい

---

<sup>1</sup> Londonで1581年に印刷された本(T. Rogers, *A pretious booke of heauenlie meditations*, London, H. Denham, 1581, STC 944)にB.1 b.2 b.3等々という奇妙な折記号の並びがある。他の例は見つからなかったが、McKerrow, *Introduction*, p. 78, n. 2を参照。

<sup>2</sup> Isocrates, *Orationes*, Genevae, S. Crispinus, 1621 (W.: K.s.3(b)).

<sup>3</sup> J. W. Jägerus, *Judicium de duabus adversariis*, Francofurti et Lipsiæ, G. W. Kühnen, 1708 (W.: DD.t.10).

<sup>4</sup> *Introduction*, p. 77.

る。実際、調査対象中では5例しか見つからなかった（London 1577年-1722年）。最後の例ではAは簡略標題紙に記されている。白紙葉の折記号に¶を使う例（Oxford 1590年）もある。

(iii) 本文の最初の折丁の折記号にBを使うやり方

すでに見たように、本文の最初の折丁の折記号にBを使うのは、イングランドで印刷された本の特徴である（いまなおOxford University Pressを含むいくつかのイングランドの印刷者の慣行である）。もちろん、たまたま前付部分がまず折記号Aで版組され、結果としてBが本文の最初の折記号になるということもありがちなので、大いに慎重な解釈が求められる。以下ではこのように偶発的に生じた例については可能な限り考察から除いている。すでに述べたように、小論の仮説は折記号Aは前付部分に使用するために取ってあるということだが、まったく当然ながら、この慣行が確立されていれば、前付部分でAとは違う他の記号が使われていたり、そもそも前付部分がないといった場合でも本文の折記号の最初にはBが使われることになる。

Londonで印刷された本で現れる最も古い例は、1552年と1569年に遡る<sup>5</sup>。16世紀には他に8例（1571年-99年）があり、Cambridgeで印刷された本に現れる例も1例（1591年）ある。17世紀にこの慣行は次第に広がりを見せ、18世紀には大半の事例を占めるに至る。最後の使用例は1796年だが、すでに述べたように、今日でもこの慣行はまた続いている——これもまた顕著な継続性の例と言えよう。もちろん、本文折記号の最初にAを置いている例も、調査対象期間を通じて見つかった（とりわけ16世紀に印刷された本）。Londonで印刷された本で、本文折記号の最初がBになっている本の総数は184点であり、Aとなっている本の総数は56であった（疑わしい事例は除いている）。OxfordとCambridgeで印刷された本で本文折記号の最初にBを置くようになったのは、Londonよりも遅かったようである。Oxfordで印刷された本でこのやり方がとられている例は1662年から1758年まで印刷された本に見つかり、Cambridgeで印刷された本では（すでに掲げた突発的な例を除けば）1691年から1741年まで見つかる。調査した中で、18世紀のDublinで印刷されたすべての本（1709年-92年）で本文折記号の最初がBとなっていたが、スコットランドで印刷された本では1例を見いだすにすぎない（Edinburgh 1711年）。実際、小論が調査対象とした本に現れている限りでは、本文折記号をAから始めるのが、18世紀にスコットランドで印刷された本の顕著な特徴的流儀である（Glasgow 1748年-63年、Edinburgh 1751年-74年）。

ブリテン諸島以外では、散発的で数少ない例しかない（AmsterdamとDouaiの例はすでに論じた）。Antwerp（1531年）、Barcelona（1543年）、Rome（1551年）、Wittenberg（1553年）、Paris（1569年、1611年、1791年）、Vienna（1570年）、Milan（1590年）、The Hague（1599年）、Rouen（1601年、1603年）、Tournon（1604年、1605年、1616年）（このグループのうち最初の例と最後の例では小文字のbが使われているのが明らかに興味深い）、Ulm（1623年）、Douai（1623年）、Lyons（1649年）、Saint-Malo（1650年）、Amsterdam（1663年）の例がある。18世紀に印刷された本では、1例（Paris 1791年）を数えるのみであった。

本文の折記号がBから始まっていれば、いつ印刷された本でも、イングランド（ないしアイルランド）で印刷された本だと推測される。18世紀に印刷された本ならこのことは明白な蓋

---

<sup>5</sup> Peter Martyr, *Most godly prayers*, London, W. Seres, 1569 (STC 24671).

然性をもっており、さらに前付部分の折記号でAabというやり方がされている場合にはいっそう蓋然性が高い。

(iv) UとV

すでに述べたように折記号ではUは通常用いられない。Vの代わりにUが用いられるのは、17世紀後期から18世紀にかけてのブリテン諸島とドイツで印刷された本に主に限られる。Londonで印刷された本に現れる最も古い例は1658年のものであり<sup>6</sup>、世紀末までしだいに使用頻度が上がっていく。1710年頃以降は通常のやり方になったとみなしてよいであろう。Vが使われている最後の例は1726年に印刷された本に見つかり<sup>7</sup>、それ以降は一貫してUが使われている。London以外でUを使う慣行になったのはやや遅いようである（以下、Uが使われた最初の年と、Vが使われた最後の年を示す）。Oxford（1665年、1677年）、Cambridge（1708年、1707年）、Dublin（1709年、Vは使われていない）、Edinburgh（1711年、1782年）<sup>8</sup>、Glasgow（1748年、Vは使われていない）。スコットランドとアイルランドで印刷された本については調査した本が少なすぎるので、ここで示した年にそこまで信を置けないが、18世紀にはイングランドで印刷された本よりもスコットランドで印刷された本の折記号でUがいっそう一貫して使われているとしてよさそうである。

ドイツで印刷された本では、イングランドで印刷された本よりもかなり後になってから、折記号にUが使われるようになったようである。18世紀にはVよりもUを使うほうがやや優勢になっていたようでもあるが、けっして標準的な慣行になることはなかった。最も古い例はAugsburgで1667年に印刷された本<sup>9</sup>の例であり、次いで古いのは1679年にBasle（ここでもまた、ドイツの特徴的なやり方が早い時期にBasleで現れている）とDresdenで印刷された本の例である。また、Frankfurtで1681年に印刷された本で、UとVが混ざっている例が見つかっている<sup>10</sup>。もっと遅い時期の例は、Nuremberg（1683年、1696年）、Leipzig（1691年 Uu、1742年）、Frankfurt（1698年-1728年）、Berlin（1704年-62年）、Hamburg（1713年-25年）、Tübingen（1717年）、Marburg（1717年）、Breslau（1727年）、Bremen（1728年）、Vienna（1754年）、Munich（1763年）、Göttingen（1769年）、Dresden（1771年）、Chur and Lindau（1772年）が見つかっている。しかし、Vはさらに調査時期の終わりまで、ずっと使われ続けている。とりわけLeipzigでは、最後の使用例が1797年である。

他の諸国では、折記号にUはめったに用いられない。Stockholm（1697年）とCopenhagen（1746年）の例があるが、ドイツの事例に含めてよいであろう。The Hagueで1例（1682年）<sup>11</sup>、Lisbonで1例（1685年）<sup>12</sup>、Parisで2例（1781年および1784年）<sup>13</sup>が見つかっている。

---

<sup>6</sup> Virgil, *Opera*, Londini, T. Roycroft, 1658 (Wing V600). さらに早い例で、VとUがどちらも使われており、Uuも出てくる例がある。Davenant, *Gondibert*, London, T. Newcomb for J. Holden, 1651 (Wing D325).

<sup>7</sup> [Wollaston], *The religion of nature delineated*, London, S. Palmer, 1726 (R.S.)

<sup>8</sup> ただしFerguson/Illinois, p. 17に1664年の例がある。

<sup>9</sup> E. Gockelius, *De europæis regibus*, Augustæ Vindelicorum, G. Goebelius, 1667 (T.: Hg 200).

<sup>10</sup> S. Bochartus, *Geographia sacra*, Francofurti ad Moenum, J. D. Zunnerus, 1681 (W.: GG. γ .12).

<sup>11</sup> Wicquafort, *L'ambassadeur et ses fonctions*, La Haye, M. G. Veneur, 1682, vol. i (W.: II.1.30). Vol. iiではVで記されている。しかし、これは疑わしい事例とみなさなくてはいけない。

<sup>12</sup> Camocns, *Rimas varias*, Lisboa, T. D. de Mello, 1685 (M.: P.O.hisp.291).

<sup>13</sup> *Code des prises*, Paris, Imprimerie Royale, 1784, vol. i (W.: 11. γ .6). 1781年の刊本もImprimerie

最後の例はたしかに難問である。革命の直前になって伝統的なフランスの慣行が部分的に放棄されたしるしと見ればよいだろう。

いずれにせよVの代わりにUを用いるのはBritishまたはドイツで印刷されたとみなす強い蓋然性が見受けられる。

#### (v) W

Wの使用例は、2例しか見つからなかった。1つ目の例は1591年に印刷された本であり、2つ目の例は1785年に刊行されたAmesの*Typographical antiquities*<sup>14</sup>である。なお後者で、刊行年不明だが16世紀にイングランドで印刷された本がおなじ特徴的流儀をもつ、と述べられている<sup>15</sup>。イングランドで印刷された本を除けば折記号にWが使われることはありそうにないと推測しても、あながち間違いではないかもしれない。ただし、1581年にSpeyerで印刷された本の折込み紙葉に、Wが使われている。

#### (vi) 2巡目以降のアルファベット

すでに見たように、折記号で用いられるアルファベットが2巡目に入ると、通常はAaといった仕方で記される。総数から言えば微々たるものだが他のやり方も多種あり、組み合わせも様々である。たとえばAの後すぐAAになるとか、AとAaの後でAAが来るといったやり方である。こうした一般性の低い変種は措く。一般に、オランダの印刷者は規範をきまじめに守ると言えるが、そのことは折記号の文字が延々長くなる場合にもあてはまる（ただし、長く使われていればそれだけでオランダで印刷された本だという証拠になるわけではない）。

2巡目にAAと記すやり方をとるのは主に16世紀および17世紀前期であり、後者の時期にはかなり広範に使われている。Parisの例は1518年から1631年まで、Lyonsの例は1558年から1604年まで見つかっている。また、La Rochelleで印刷された本に1例（1581年）見つかっている。Antwerpで印刷された本では、1531年から1634年までの本に見つかっている。Basleで印刷された本（1555年-76年）では広がりを見せていないが、Genevaで印刷された本（1540年-1651年）ではかなり使われている。ここでもまた16世紀の慣行がGenevaでは他の多くの地域よりも長く使われ続けている。Zurichで印刷された本に2例（1558年、1559年）見つかっている。Antwerpで印刷された本では、6例が短期間に集中して見つかる（1555年-69年）。他のイタリアで印刷された本の例は、Rome（1551年）、Palermo（1558年）、Naples（1590年）、Genoa（1615年）、Bologna（1627年）で見つかっている。ドイツで印刷された本のうち最もよく使われているのは、Frankfurt（1579年-1638年）である。他の例は、Cologne（1535年、1537年、1603年）、Hanau（1607年）、Leipzig（1691年）がある。オランダで印刷された本では、Amsterdam（1597年）とLeiden（1609年）の2例を数えるのみである。スペインで印刷された本に1例（Barcelona 1543年）、イングランドで印刷された本に1例（London 1579年）が見つかっている。18世紀に印刷された本では、1例（Padua 1722年）しか見つかっていない。以上から言えることは多くないが、印刷年代の特定はできるかもしれ

---

Royaleで印刷されたものである。

<sup>14</sup> London, T. Payne et al., 1735 (Bod : 258.d.7-9).

<sup>15</sup> Ibid., p. 362. 他の2つの16世紀の例について以下を参照。W. A. Jackson, *The Carl H. Pforzheimer Library* (New York, 1940), nos. 73 および 467.

ない。ただし、AAという記載の仕方は、17世紀の最初期以降オランダで印刷された本ではまず見つからないと言ってよい。

他方、AA（大文字とスモールキャピタル）と記すやり方は、18世紀のやり方である。Florence（1725年）とGlasgow（1763年）の例が見つかる。またAAA Aaaa AAAAAというやり方がTurin（1654年）に見つかっている。

AAa（またはAAaa）と記すやり方は主にParisで印刷された本に見られ、1552年から1719年まで、かなり頻繁に用いられた。Lyons（1558年-1689年）、Bordeaux（1601年）、Coligny（1616年）、Troyes（1641年）、Saint-Malo（1650年）、Geneva（1617年、1644年）でも使用された例が見つかる。他の国では、Cologne（1603年）とRotterdam（1720年）の2例のみである。明らかに、このやり方はフランスで印刷された本のものだと推測できよう。

通常のパターンを略記する便利な方法として3A（または4Aまたは5A）と記すやり方は、主に、ブリテンで18世紀に印刷された本に限られる。London（1729年-98年）、Edinburgh（1762年-74年）の例がある。ブリテン以外では、初期にParisで印刷された本で用いられた例が1例（1567年）あり、順番を逆にしてA3と記された後年の例が1例（1724年）ある。**\*A**と記すというやり方も、Londonで印刷された本（1728年）に見つかっている。

最後に、Lyonsで16世紀に印刷された本で2つの妙なやり方が見つかっている。ひとつはaAと記すやり方（1560年）であり、もうひとつはAaA、aAa、AaAaという奇妙な順番で並べるというやり方（1553年）である<sup>16</sup>。

#### (vii) SfとSs、VuとVv

これらの記し方をさまざまな組み合わせで行うことは多くの地域で行われているので、なんらかの決定的な結論を導くのは難しい。さらに、折記号が2巡目のアルファベットのこの文字まで達するのはほんの一握りの本だけなので、頼れる資源も少ないということになる。以下では印刷地の特定に繋がるような観察だけを述べることにする。折記号の1巡目でUが使われていれば、当然ながら2巡目にもUuを使うのが通例であり、そのことについては説明する必要はない。

最も目をみはる特徴的流儀は、SfとVuというやり方を好むというParisの非常に強い傾向であり、1552年から1774年までの大多数の事例に認められる。実際、これは標準的なParisのパターンの一部となっている。他の点同様に、このパターンが崩れるのはフランス革命直前になってからであった。ただし例外もないわけではない（Vvが使われる例がSsが使われる例より多い）、この特徴的流儀だけからでは、せいぜい補強証拠が期待できるにすぎない。Lyonsで印刷された本では、どちらのやり方もほぼ同等に使われている。他のフランスの諸都市で印刷された本は、材料が少なすぎて判断できない。

Antwerpでは、Plantin印刷所が稼動していた時期が終わるまでSfが好まれ（1537年-1628年）、VuとVvが均等に分布している。Basleで印刷された本の通常組み合わせは、SsとVuである（1559年-1655年）。Sfが用いられている例は1例のみ（1679年、Ssも使われている）、Vvが使われている例も1例のみ（1555年）、sとuが用いられている例も1例のみ（1538年）見つかった。SsとVuはどちらも、Zurichで印刷された本（1558年-65年）でも使われている。他方、Genevaで印刷された本では、Sfが優勢であるが、どちらのやり方も例が見られる。

---

<sup>16</sup> Galen, *Epitomes*, Lugduni, G. Rouillius, 1553 (W. : HH.mn.21).

オランダで印刷された本では、どちらのやり方も同程度に分布しているが、18世紀ではSsが使われるほうが多い。他方、Vvが強く好まれる傾向がある。17世紀にはSfとVvを使うのがよくある組み合わせである。Vuが使われていれば、とりわけ18世紀の本では、オランダで印刷された本ではないかもしれない、という若干の推測ができそうである。

イングランド（およびスコットランド）で印刷された本では、Sfがたいへん頻繁に見られる。Londonで印刷された例は1574年から1798年まで見ついている。Ssが使用された例の印刷年は1650年、1728年（fも用いられている）、1777年、1782年である。OxfordやCambridgeで印刷された例はなく、Edinburghで1例（1582年）、Glasgowで1例（1748年）であった。17世紀後期と18世紀には、もちろん、Uuを使うのが通常のやり方である。VuとVvが使われている割合はほぼ同等である。概して、Ssを折記号に使うのはイングランドで印刷された本ではない、と考えて差し支えないといえる。

ドイツとイタリアで印刷された本では、時代を追って発展しているという明白な兆候がある。17世紀末まではSfとVuを用いるのが優勢であったが、それ以降ではSsとVvを用いるのが優勢になっている。このことはLeipzigで印刷された本で最もはっきり示されている。つまり1655年から1677年まではSfとVuが使われ（Ssが使われている例が1593年の刊本に1例、Vuが使われている例が1783年に1例ある）、1705年から1797年まではSsとVvが使われるのである。ただし、厳密にこのような変化があると言えるわけではない。Frankfurtで印刷された本では初期から（1576年-1698年）Ssが優勢であるし、Strasbourgで印刷された本ではSsしか見つからない（1609年-1743年）（この例からもStrasbourgで印刷された本がフランスの慣行から縁遠いということがわかる）。Antwerpで印刷された本では、1573年から1715年までSfとVuが使われているが、1580年と1756年と1773年にSsが使われた例がある。ここでは趨勢を問題にしているだけで、絶対視すべきでないということが明らかである。

#### (viii) 文字の代わりにアラビア数字を使うやり方

文字ではなくアラビア数字を使うやり方は、おそらく19世紀以降は、折記号を記す際に最もよく使われるやり方であろうが、調査対象中ではParisで印刷された本に2例（1766年、1788年）<sup>17</sup>、Parmaで印刷された本に1例（1795年）、の計3例が見つかるのみであった<sup>18</sup>。伝統的な観点からアラビア数字を使うのを嫌っているのが明白である。とはいえ、18世紀に印刷された本に後年のやり方の起源が見つかるのは興味深いし、FournierとBodoniがこのやり方の形成に一定の役割を果たしていたというのも関心を惹く。

#### (ix) 折記号を記す際にアルファベットを省略するやり方

1596年にLondonで印刷されたある本は、B、2、3という順序で記されている<sup>19</sup>。これはRobert Waldegraveという印刷者のよく知られた慣行である<sup>20</sup>。おなじやり方が18世紀に

<sup>17</sup> Fournier, *Manuel typographique*, vol. ii, Paris, J. Barbou, 1766 (Bod; 258.c.24) (1764年に刊行された第1巻では通例使われるような文字が用いられている); J. B. Mercier, *La solitude*, Paris, Librairie Économique, 1788 (R.S.).

<sup>18</sup> Bernis, *La Religion vengée*, Palme, Dans le Palais Royal, 1795 (M.: P.O.gall.9m).

<sup>19</sup> R. Agas, *A preparative to plating*, London, T. Scarlet, 1596 (STC 195).

<sup>20</sup> Cf. J. Dover Wilson, 'A date in the Marprelate controversy', *The Library*, II, viii (1907), 356. これは、秘密を絶対に守らなければならないときでも印刷者がふだんのやり方に固執する好例である。

Sassariで印刷された本（1774年）で再び見られ<sup>21</sup>、(A、A2、3、4、5、6という仕方) Parisで印刷された本（1798年-9年）で見られる<sup>22</sup>。

（翻訳ここまで）

## 二、Sayceの諸説の検討

### (1) 本文の折記号

センター所蔵資料で調査した中で16世紀に印刷された本は270件あり、そのうち本文の折記号を小文字アルファベットから始めていたのは55件（20%）、大文字アルファベットから始めていたのは214件（79%）であった。残りの1件では折丁の最初の紙葉のみに数字を連番で打つという後年普及するやり方が早くも使われており、注目に値する（[Bernard de Girard], *Discours sur les causes de l'extreme cherte qui est avjourd'huy, en France, et sur les moyens d'y remedier*, Paris, A l'Oliuier de Pierre L'Huilier, 1574）。

折記号が小文字アルファベットから始まっているもののうち、アルファベットが1巡するよりも前に本文が完結しているもの14件を除く41件のうち、2巡目以降も小文字アルファベットのみで折記号が記されている（aa~zz、aaa~zzz）のは7件（Paris 2件、Leyden 2件、Venice 1件、Lyon 1件、印刷地および出版地不詳1件）であり、なんらかの仕方で大文字アルファベットを混ぜて折記号が記されているもの（Paris、Lyon、Basle、Geneve、Venice等）に比べて、少ないといえる。大文字アルファベットを混ぜる仕方にはヴァリエーションがあるが、調査対象中で最も一般的だったのは、a→A→Aa→AA→AAa→AAA→…などというように増やしていくやり方である。また興味深いことに、アルファベットの代わりに&が用いられるやり方も見られた。Parisで1524年に印刷された*De asse et partibus eius libri quinq[ue] Gulielmi Budaei Parisiensis, secretarij regij*, Vænundantur in ædibus Ascensianis (Josse Badius)では、小文字アルファベットを使い切った後に&が折記号として用いられている。Jean Bodin, *Les six livres de la Republique de I. Bodin Angeuin a monseigneur Dv Favr, seigneur de Pibrac, conseiller du roy en son Conseil priué*, A Paris, Chez Iacques du Puys, 1577では、a→A→Aaの順序でアルファベットが用いられたあと、&&が用いられている。Veniceで1519年に印刷されたPietro de' Crescenzi, *De agricultura vulgare*では、小文字アルファベットが1巡した後、&を含む独特の記号が用いられてから、大文字アルファベットに移っている。1521年にFlorenceで印刷された*Libri de re rustica a Nicolao Angelio uiro consumatissimo nuper maxima diligentia recogniti & typis excusi, cum indice & expositione omnium dictionum. Catonis. Varronis. Columellae. Palladij*も同様である。本文折記号で&やその他の記号を用いる例についてSayceでは言及されていないが、これらがParisおよびイタリアで16世紀に印刷された本に限られる現象なのか、検討すべきである。ただし、強調しておくべきなのは、繰り返しになるが、同一の印刷者であっても、折記号の記し方が一定していたわけではなく、1冊ごとにはばらつきが見られるということである。印刷地ないし印刷者と折記号の記し方とは1

---

Waldegraveについては *The Carl H. Pforzheimer Library*, nos. 6, 529, 641, App. 3 の Jackson の文章も参照。

<sup>21</sup> F. Cetti, *I quadrupedi di Sardegna*, Sassari, G. Piattoli, 1774. (T.: Bh 12).

<sup>22</sup> A.-J. Canolle, *Délice de la solitude*, Paris, Deroy, An VII, vol. i (R.S.).



対1の対応関係があるわけではなく、傾向にとどまる。

折記号を大文字アルファベットから始めているものでは、折記号が2巡目に入っていない118件を除く96件のうち、5件で2巡目の折記号に小文字アルファベットを用いていた。内訳はLondon、Strasbourg（2件）、Basel、Veniceである。

おなじことを17世紀に印刷された本について調べてみると、1,270件中小文字アルファベット16件（1%）、大文字アルファベット1,253件（99%）、数字のみによる折記号1件であった（ただし、後述する理由で、小文字アルファベットが採用されているうち4件については疑問の余地がある）。また、18世紀に印刷された本については、5,507件中小文字アルファベット65件（丸括弧で囲まれたもの3件を含む）（1%）、大文字アルファベット5,356件（丸括弧で囲まれたもの3件を含む）（97%）、数字のみによる折記号49件（1%）、折記号が記載されていないもの32件（1%）であった。（残る5件については後述。）

したがって、第1の観察として、小文字アルファベットを本文折記号に用いるやり方は主に16世紀のもので、それ以降はまったく例外的だが、けっして完全に見られないわけではない。その出版地もParis、Frankfurt、Cologne、Leyden、Basel、Bern、Venice、Copenhagen、Wienなど多様であって、Sayceの結論とは異なり、どの地域のものとも蓋然性をもって推測することはできない。

小文字アルファベットa~zからはじめて、大文字アルファベットA~Zに移り、さらに両方が組み合わせて使われるAa~場合もある。ゲオルク・アグリコラによる『鉱山書』*Georgii Agricolae ... De re metallica libri XII*, Basileæ, Sumptibus & typis Emanuelis König, anno 1657では、そのようなやり方が採用されている。Hannoverで1620年に印刷された本でも、おなじやり方が用いられている。

ところで、折記号は一冊の本を印刷し綴じ製本する工程で使用される技術的な符号であるから、もっぱら読者の利用の便に供せられるページ番号とは異なる連続性をもつ。したがって本の内容と連関する必要はかならずしもないが、場合によってはひとつの著作の異なる部分に対して異なる仕組みの折記号をつけるというやり方があった。その最も顕著な例は前付折記号と本文折記号が異なる体系をもつことであるが、本文内についても同じことが起きる場合がある。*Historia venetiana di Paolo Paruta, caualiere, et procuratore di S. Marco, diuisa in due parti*. In Venetia, appresso Domenico Nicolini, 1605は全体で1000ページを超える大著だが、第1部ではAからはじまる大文字アルファベットの折記号（Aa~Zz、Aaa~Zzz、…と続き、Oooooまで）、第2部ではaからはじまる小文字アルファベットの折記号（rrまで）が用いられている。この場合は第1部の折丁に大文字アルファベットの折記号を振り、第2部の折丁に小文字アルファベットの折記号を振っているのである。これらはおそらく同時に刷られたが、それぞれの部分ごとに、工程上は一冊の本であるかのように作成されたのであろう。

だとすれば、今日どのような状態で製本されているかにかかわらず、もともとどのような単位で印刷や発行がおこなわれたかを知らなければ、本文折記号が実際に小文字アルファベットからはじめられているとは断言できないことになる。実際、折記号が小文字アルファベットで記されている本のなかにElzevirで印刷された2冊の本があるが、そのうち*Ubbonis Emmii Republicæ Græcorum. Pars secunda*. Lugd. Batav., Ex officina Elzeviriana, anno 1632は、*Græcorum respublicæ ab Ubbone Emmio descriptæ*, Lugd. Batavorum, Ex officina Elzeviriana, anno 1632の第2部として発行されたもので、両者が合冊されている。同様に、*Respublica sive Status Imperii Romano-Germanici*, tomus II, Lugd. Batavor., Ex officinâ Elzevirioru, 1634

も独立した標題紙をもつが、実際には第1巻とともに一冊に綴じられている。これらの例では、純粋な意味では、本文折記号に小文字アルファベットを与えているとは言えないかもしれない。

同様に、Æneæ Sylvii ... De Bohemorum, et ex his imperatorum aliquot origine ac gestis, ad illustrissimum principem & dominum Alfonsum, regem Aragonum, historia, Francofurti, Impensis Johannis Georgii Steck, 1687の場合も、Jo. Dubravii, *Olomuzensis episcopi, Historia Bohemica, à cl. v. Thoma Jordano medico genealogiarum, episcoporum, regum, ducum catalogis ornata & necessariis annotationibus illustrata*, Francofurti, Impensis Johannis Georgii Steck, 1687という著作の一部であり、そのことは総合標題紙上にも記されている (cui in fine adjecta Æneæ Sylvii, cardinalis, De Bohemorum origine ac gestis historia)。前半の折記号は A-Z<sup>8</sup>, Aa-Zz<sup>8</sup>, Aaa-Nnn<sup>8</sup>となっているが、後半は同じ仕組みを取らず a-m<sup>8</sup>となっている。おそらく同様に、フランス・ロレーヌ地方の都市 Pont-à-Mousson の Iean de La Fontaine によって 1608 年に印刷された本も、大文字アルファベットの折記号を記された部分との関係で、小文字アルファベットの折記号が記されたのであろう。

Sayce が言及している Plantin 工房で印刷された本についてはどうだろうか。今回調査対象にしたセンター所蔵本のうち、Plantin 工房刊と記された出版物は 16 点 (1560 年-1587 年) あり、そのうち Christoph Plantin 時代のものは、ラテン語書 4 点 (標題紙に Ex officina Christophori Plantini と記されている)、フランス語書 2 点 (De l'imprimerie de Christophle Plantin)、オランダ語 3 点 (Ghedruct by Christoffel Plantijn) の計 9 点であった。そのうちすべてで本文折記号が大文字アルファベットではじめられており、折記号が 2 巡目以降にかかるもの 2 点では 2 巡目に小文字アルファベットが使われていた。3 巡目については 1 点は Aa のように記され、もう 1 点は AA のように記されていた。なお、前付ページがあるのは 3 点であるが、そのうち 2 点は前付折記号にも大文字アルファベットを用いており、残る 1 点はアステリスクを用いていた。したがって、この単純な観察から、Plantin では本文折記号を大文字アルファベットからはじめて 2 巡目には小文字アルファベットを用いるという Sayce の仮説は正しそうだ、ということになる。ただし、3 巡目については、Aa と記すか AA と記すか確定的でない。実は Christoph 時代の Plantin 工房で印刷された本については、すでに Voet によるかなり網羅的な目録が作成されており<sup>23</sup>、折記号のつけ方についても詳細に記録されているが、それを参照しても、Sayce の仮説が正しいといえる。

次に Christoph の後継者によるものを見てみると、Christoph の娘婿であった Franciscus Raphelengius の息子である Christophorus Raphelengius が 1590 年および 1593 年に Leyden で印刷した 2 点 (Ex officinâ Plantiniana, apud Christophorum Raphelengum)、および同じく娘婿の Jan Moretus が Antwerp で 1604 年と 1605 年 (2 点) に印刷した計 3 点 (Ex officina Plantiniana, apud Ioannem Moretum) では、同様に本文折記号が大文字アルファベットではじめられ、折記号が 2 巡目にまたがる 2 点については 2 巡目で小文字アルファベットが用いら

---

<sup>23</sup> Leon Voet, *The Plantin Press (1555-1589) A bibliography of the works printed and published by Christopher Plantin at Antwerp and Leiden*, in collaboration with Jenny Voet-Grisolle, Amsterdam, Van Hoeve, 1980-3. Plantin 工房については以下も参照。Id., *The golden compasses. A history and evaluation of the printing and publishing activities of the Officina Plantiniana at Antwerp*, 2 v., Vangendt, Routledge, Abner Schram, c1969-1972. 印刷博物館編『プラントアン＝モレトウス博物館展 印刷革命がはじまった グーテンベルクからプラントアンへ』凸版印刷株式会社印刷博物館、2005 年。

れていた。しかし、17世紀になってからLeydenで印刷されたPlantin工房印刷本（Ex officina Plantiniana Raphelengii）では、1点（1613年）は本文の折記号に小文字アルファベットが用いられ（Wilebrordi Snellii R.f. De re nummaria liber singularis）、別の1点（1616年）では大文字アルファベットが用いられていた。したがって、上記のSayceの仮説がPlantin工房印刷本全般にあてはまるものなのか、Christoph時代の印刷本に限るのか、あるいはAntwerpで印刷された本に限るのかは、さらに調査を進める必要がある。

興味深い事例として、KehlのImprimerie de la société littéraire-typographiqueで印刷されたVoltaire全集（1784年～1785年）では、すべての巻にわたって、各折丁の第1紙葉に限って、折記号の前に短剣符が打たれている。この特徴が何を意味しているのかは結論を差し控えたい。

*Icon regia monarchæ sinarvm nvnc regnantis, ex Gallico versa*では、本文に(A)\*, (A2)\*, …という、かなり特徴的な折記号が用いられている。これはイエズス会士Joachim Bouvetが記した康熙帝の伝記*Histoire de l'empereur de la Chine*のラテン語訳であり、Gottfried Wilhelm Leibnizの中国研究*Novissima Sinica*（第2版）にも同一のテキストが含まれている（使われている意匠や折記号も同一である）。センター所蔵の本書がLeibnizの同書の一部であるか、あるいは単独で出版されたものであるかはっきりしない<sup>24</sup>。標題紙には著者や印刷地および出版地の表記はなく、anno MDCXCIX（1699年）という出版年だけが記されているが、序文で著者がJoachim Bouvetであることが明かされている。序文の折記号では逆順の丸括弧で数字をはさむやり方)2(, )3(, )4(, …が採用されており、前号（116-117頁、133-134頁）の観察に従えば、ドイツまたはその影響圏で製作されたものである蓋然性が高い。

18世紀の事例で大文字と小文字が混用されていたものが5件あった。ここで述べたいのは、既述したような小文字ないし大文字のシークエンスが終わったあとに大文字または小文字に移るという例ではなく、ひとつのシークエンスの中に大文字と小文字が入り混じっているという意味である。そのうち3件には規則性が見られた。1件では、大文字Aのつぎの折丁では小文字bが記され、その次はまた大文字Cが記されるというように交互に大文字と小文字が記されていた（*Anleitung zur gerichtlichen und aussergerichtlichen Behandlung der Fideikommissen in den k.k. Staaten*, aus den hierüber bestehenden allerhöchsten Gesetzen entwickelt und sistematisch behandelt von Joseph Karl Grafen von Auersperg, Prag, Bei Johann Herrl, 1794）。2件ではaが小文字であり、以下B、c…と続いていた（Abbé Barruel, *The history of the clergy during the French Revolution, in three parts*, Third edition—First American, Burlington, Printed by I. Neale and H. Kammerer, jun., 1794; *The federal ready reckoner, or, Trader's valuable guide in purchasing and selling all kinds of articles, by wholesale and retail*, Printed at Worcester, Massachusetts, By Leonard Worcester, 1795）。これらはほぼ同時期に印刷されているが、印刷者や印刷地はまったく異なる。この特徴が意味するものについても、結論には至らなかった。

第2の観察として、18世紀末にかけて数字のみによる折記号が広く用いられるようになる兆候が見られる。センター所蔵資料の調査では、1669年にLondonで数字のみの折記号が例外

---

<sup>24</sup> Google Booksでバイエルン州立図書館蔵書が電子化されたものを閲覧することができるが、見た範囲では（折丁の状態など電子資料からは把握できない要素もあるが）、同一のようであった（2015年12月21日閲覧）。別発行の可能性もあるし、所持者が別々に製本した可能性もある。

的に使われたことがある。イソップ寓話 *Fables, of Æsop and other eminent mythologists: with morals and reflexions*, by Sir Roger l'estrange, Kt., The third edition corrected and amended, London, Printed for R. Sare, B. Took, M. Gillyflower, A. & J. Churchil, G. Sawbridge, and H. Hindmarsh, 1669 では、各折丁の第 1 ページの左下隅にハイフンで囲まれた数字- 1 -, - 2 -, … が記されている。他の紙葉には折記号が記されていないが、キャッチワードが毎ページに記されている。標題紙裏に London: Reprinted and published by John Gray and Co. と記載されているが、John Gray で製作された他の本を見ても、同様のやり方が採用されているようではない。その後は、1790 年代に Basel、Paris、Verona、Worcester、Hamburg で印刷された本で用いられるまで待たなくてはならない。

さらに、第 3 の観察として、18 世紀にはいると折記号を記さないやり方も見られるようになる。そのほとんどは薄いパンフレットや法令文書である。

## (2) 小文字の k の代わりに lz と記すやり方 (27 ページ参照)

Sayce が言及している McKerrow の指摘とは、16 世紀のフランスでは、小文字の k が使用されることがなかったので活字そのものが存在せず、折記号として利用したいときには「大文字の K を小文字の k の代わりに用いるか、初期から Estienne 一族に至る多くのフランスの印刷者が行ったように、k や kk の代わりに lz と lzlz を用いるという風変わりなやり方がなされた」(註 4 参照) ということである。

センターの調査対象資料中、本文折記号が小文字アルファベットではじまって k 以下まで続いている 16 世紀に出版された本は 49 点あり、そのうちフランスで出版されたのは 25 点あった。折記号として小文字の k の代わりに lz が用いられていた例が 1 点あった (*Compendiosa rerum memorandarum[m] descriptio, ex immensis Francisci Patritij Senensis, de regno deque institutione reip. voluminibus deprompta ...*, Parisiis, Ex typographia Petri Calteri, sub insigni vineæ, via ad D. Iacobum, 1552)。また折記号が小文字アルファベットで記されているのに K に限って大文字で記されている例が 3 点あり (1550 年刊の出版地不詳のイタリア語書籍 2 点 *Historie di Nicolo Machiavelli cittadino et secretario Fiorentino, al santissimo et beatissimo padre signore nostro Clemente VII Pont. Mass ; Discorsi di Nicolo Machiavelli cittadino et secretario Fiorentino, sopra la prima deca di Tito Livio, a Zanobi Buonelmonti et a Cosimo Rucellai* および、1586 年刊のラテン語書籍 *Io. Bodini Andegauensis, De republica libri sex, latine ab autore redditi, multo quam antea locupletiores. Cum indice copiosissimo*, Lugduni et venundantur Parisiis, Apud Iacobum Du-puys, sub signo Samaritanae, 1586)、他の折記号はイタリック体で記されているのに k に限って直立体で記されている例が 2 点 (*Mores, leges, et ritus omnium gentium per Ioannem Boënum ... ex multis clarissimis rerum scriptoribus collecti, cum indice locupletissimo*, Lvgdvni, Apud Ioannem Tornæsium & Gul. Gazeium, 1556 ; *Polydori Vergilii Vrbinitis De rerum inventoribus libri octo : eiusdem in orationem dominicam commentariolum, cum indice & rerum & verborum locupletissimo*, Basileæ, Per Thomam Guarinum, 1570)、反対に k に限ってイタリック体で記されている例が 1 点 (*Ioannis Thomæ Freigii Quæstiones oeconomicæ et politicæ : cum alijs quibusdam (eiusdem argumenti) doctorum uirorum commentationibus ut uersa pagina docet*, Basileæ, Per Sebastianum Henricpetri, anno salvtis nostræ instavratae 1578 mense Martio) があった。発行地が Lugduni と記されている 2 点は印刷者の名前から Lyon で印刷されたものであるとわかる。

また、おそらく Basle でも k をめぐる困難に直面していたであろうということが示唆される。ただし、すでに述べたように、フランスで印刷されていても k が用いられている例のほうがはるかに多いので、McKerrow 説で完全に説明できるわけではない。

### (3) 簡略標題紙への折記号の記載 (27 ページ参照)

一般に白紙葉や簡略標題紙では折記号の表示が省略されるが、Sayce はそれが記されている本があると指摘している。簡略標題紙 (half-title) とは標題紙の前に配置された紙葉で、通例、実際の標題の一部や簡略化された題名が表示されている。もともと輸送中に標題紙が痛むのを保護するために一枚の白紙葉でくるんでいたものが、内容がわかりやすいよう簡略化された題名を記載するようになり、やがて書物の一部を構成するものと考えられるようになったとされ、18 世紀までに一般化するようになったとされる。

今回、センター所蔵資料について行った調査では、この仮説を網羅的に解明することはできなかった。調査対象中では、Julien Offray de La Mettrie が 1745 年に匿名で出版したとされる (François-Joseph Hunauld の作とする説もある) *Histoire naturelle de l'ame, traduite de l'anglois de M. Charp, par feu M. H\*\**, A la Haye, chez Jean Neaulme, libraire では、簡略標題紙に A という折記号が記されており、Emil Weller による印刷地を偽った本のリスト *Die falschen und fingierten Druckorte, 2. Bd.* において、実際には Paris で出版されたものと推定されている。Sayce はこの表示がイングランドで印刷された証拠になりうると論じているから、その点では齟齬がある。今後の検討課題である。

### (4) 本文の最初の折丁の折記号に B を使うやり方 (28 ページ参照)

センターで調査した対象のうち、本文折記号を大文字の B から始めている本は 883 件見つかった (前号ではそのうち前付折記号のある本のみを調査したので、件数が異なる。前号 138 ページ参照)。

Sayce も言及しているように、本文折記号を B で始める慣行に従ったものか、それとも前付部分がたまたま折丁ひとつに収まったので結果として本文折記号が B から始まっているのか判定することは困難を伴う場合がある。疑わしい例を除いて、センターで調査した対象のうち最も早くこの慣行に従ったものは、1582 年に London で Ralph Newberry と Henry Bynneman によって印刷された図書である<sup>25</sup>。16 世紀にはそのほか 2 件の使用例があるが、いずれも London で印刷されたものである (印刷者は Henry Middleton、John Windet)。

17 世紀の例も、圧倒的に London に偏っている (99 件)。これは、センターの調査対象資料中 17 世紀に印刷地ないし出版地が London と表示されている本 362 件のうち、27% に相当する。他の例は Venice (1606 年)、Rouen (1618 年)、Oxford (1634 年)、Torino (1652 年)、Valencien (1665 年)、Leipzig (1668 年)、Edinburgh (1675 年)、Oxford (1699 年) である。

18 世紀の本で本文折記号が B からはじまっているものは、763 件あった。そのうち、London が印刷地ないし出版地として明示されているものが 620 件である。印刷地ないし出版

---

<sup>25</sup> 本稿では印刷者の特定にあたって、図書自体に記されている事項のほか、すでに作成されている書誌類を参考にしている。特に Consortium of European Research Libraries によるデータベースサイト CERL Thesaurus (<https://thesaurus.cerl.org/cgi-bin/search.pl>) は有益であった。煩雑さを避けるため、特別な場合を除いて、参考にした文献すべてをその都度挙げることはしない。

地がLondonとなっている18世紀の本は全体で1,367件あったから<sup>26</sup>、45%で本文折記号がBから始まっていることになる。

London以外の印刷地（出版地）表示は、Amsterdam 1件、Basle 16件、Bath 2件、Birmingham 7件、Boston 8件、Burlington 1件、Cambridge 1件、Colchester 1件、Dublin 45件、Edinburgh 2件、Exeter 1件、Glasgow 3件、Gloucester 3件、Hartford 3件、New Haven 1件、New London 1件、Newport 1件、New York 2件、Nottingham 1件、Oxford 1件、Paris 1件、Philadelphia 15件、Salisbury 1件、Southampton 1件、Warrington 1件、Weissenfels / Leipzig 1件、Worcester 3件であった（このほか出版地も印刷地も不明のものが数件ある）。

そのうち1冊*Political debates*（1766年）は、William Pittが印紙法に関して庶民院で1766年1月14日に行った演説を活字化したものだが、出版事項（A Paris, Chez J.W. imprimeur, rue du Colombier Fauxbourg St. Germain, à l'Hotel de Saxe）こそフランス語で記されているものの、本文を含むそのほかの部分は英語で表記されており、English Short Title Catalogue (ESTC) によれば（T43956）、Londonで印刷されたと推定されている<sup>27</sup>。また、Amsterdam（1764年）で印刷されたと標榜する*The Origin and progress of despotism. In the oriental, and other empires, of Africa, Europe, and America*（Nicolas Boulanger, *Recherches sur l'origine du despotisme oriental*の英訳）も、ESTCによって、Londonで印刷されたものではないかとされている。ここで推定の根拠にまで遡る余裕はないが、偽りの印刷地と疑われていることそのものを重視してよいのではないだろうか。

Basleのものは前号でも触れたTourneisenの印刷によるものであるから、それを除けば、18世紀の例はおそらくすべて英語圏のものだ、ということになる。

さきほど述べたのは大陸の都市が出版事項に記されているが実際にはLondonで印刷されたと推測されているものだが、それと反対の例も考えられるだろうか。18世紀にフランスで出版された政治的ないし宗教的な内容を含む書物のなかには、検閲逃れのために出版地を偽ってLondonと記したものがあがるが、そのような書物の折記号はどのようになっているだろうか。センターで所蔵しておりLondonが印刷地として表示されている1750年から1789年までに出版されたフランス語の出版物のうち、Emile Wellerが作成した印刷地を偽った出版物のリスト<sup>28</sup>に掲載されている25件（*Mémoires de l'abbé Terrai*やD'Holbachの*Système de la nature*を含む）を調査したところ、本文折記号がBからはじまっているものは皆無であった。もちろんここでもWellerの推定の根拠を不問にしているから、論証としては不十分であるが、ひとつの参考になるであろう。

したがって、おおよそSayceの結論を追認することになるが、本文の折記号をBから始めている本は英語圏で印刷された本である蓋然性が高い。特に18世紀についてそのことが認められる。例外はBasleのJ. J. Tourneisenによる刊本である。Tourneisenは17世紀末から18世紀はじめにかけての大陸における英語文献の最大手の版元であったが<sup>29</sup>、印刷上の特徴まで正

<sup>26</sup> ただし、そのうち25件は、後述するように、実際にLondonで印刷されたか疑わしい。

<sup>27</sup> <http://http://estc.bl.uk/>

<sup>28</sup> *Die falschen und fingierten Druckorte. Repertorium der seit Erfindung der Buchdruckerkunst unter falscher Firma erschienenen deutschen, lateinischen und französischen Schriften*, 2 v., G. Olm, 1970.

<sup>29</sup> Cf. Giles Barber, "J.J. Tourneisen of Basle and the Publication of English Books on the Continent c. 1800," *The library*, v. 5-xv, Issue 3, 1960. 以下のモノグラフは未見である。Martin Germann, *Johann*

確に似せていることになる。

#### (5) 折記号におけるUとV (29 ページ参照)

センターの調査対象資料中、折記号の順序づけがUまたはVまで到達していたものは、3,505点あり、そのうち折記号としてUが用いられていたのは、1,632点あった。地域別に見ると、フランスで印刷ないし出版されたと表示されている本 629 件中、Uが9件 (1%)、Vが620件 (99%)。ベルギーで印刷ないし出版されたと表示されている本 37 件 (1570年-1788年) 中ではすべてV。スイスで印刷ないし出版されたと表示されている本 120 件中、Uが27件 (23%)、Vが93件 (78%)。イタリアで印刷ないし出版されたと表示されている本 165 件中、Uが8件 (5%)、Vが157件 (95%)。オランダで印刷ないし出版されたと表示されている本 298 件中、Uが4件 (1%)、Vが294件 (99%)。ドイツで印刷ないし出版されたと表示されている本 1,067 件中、Uが807件 (76%)、Vが260件 (24%)。イングランドで印刷ないし出版されたと表示されている本 748 件中、Uが582件 (78%)、Vが166件 (22%)。スコットランドで印刷ないし出版されたと表示されている本 32 件 (1727年-1795年) およびアイルランドで印刷ないし出版されたと表示されている本 37 件 (1737年-1795年) ではすべてU。アメリカで印刷ないし出版されたと表示されている本 33 件 (1771年-1798年) 中、Uが30件 (91%)、Vが3件 (9%)。スペインで印刷ないし出版されたと表示されている本 39 件 (1571年-1791年) ではすべてV。デンマークで印刷ないし出版されたと表示されている本 18 件 (1761年-1773年) 中、Uが15件 (83%)、Vが3件 (17%)。ラトビアのRigaで印刷ないし出版されたと表示されている本 10 件 (1771年-1797年) ではすべてUであった。(印刷地と出版地が異なるために重複して数えているケースや、印刷地も出版地も不明であるケースがあるため、総数は一致しない。)

したがって、Uが優勢なのはドイツ、イングランド、スコットランド、アイルランド、アメリカ、デンマーク、ラトビアであり、Vが優勢なのはフランス、ベルギー、スイス、イタリア、オランダ、スペインである。

もちろんUが用いられているものの中でも、例えばフランスで印刷されたものの中には (Sayceも挙げているが) *Imprimerie royale* によるものも含まれており、絶対的な規範ではないといえるが、傾向は明白であるといえる。

英語圏でUが使われるようになった時期は、もちろん英語で使われるラテン文字においてUとVが区別されるようになった時期と関係がある。特にゴシック書体が使用されていた時代では、一見してUであるかのように見えても、UとVの区別がない以上、Uが使われているとは言えない。センターの調査で最も古いUの使用例であると考えられるのは、Londonで1649年に印刷された *An act for raising of ninety thousand pounds per mensem, for the maintenance of the forces raised by authority of Parliament, for the service of England & Ireland, for six moneths, from the 25th of March, 1649, to the 29th of September, 1649 ...*, London, Printed for Edward Husband ... and are to be sold at his shop ..., April, 17. 1649 (お

---

*Jakob Thurneysen der Jüngere 1754-1803. Verleger, Buchdrucker und Buchhändler in Basel. Ein Beitrag zur Geschichte der Spätaufklärung in Basel und zur Geschichte des Eindringens der englischen und französischen Aufklärung im deutschen Sprachgebiet am Ende des 18. Jahrhunderts.* Helbing & Lichtenhahn, 1973.

そらく一連の法令集の一部)であり、Wはまだ使われていないが(VVと綴られている)、本文中で少なくとも活字上はUとVが区別されている。

イングランドで印刷ないし出版されたと表示されている本について、あらためて世紀別にUとVのどちらが使われているかを眺めると、16世紀8件ではすべてV、17世紀119件中Uが52件(44%)、Vが68件(57%)、18世紀621件中Uが526件(85%)、Vが95件(15%)であった。すでに述べたように17世紀の最初の使用例は1649年のものであり、18世紀の使用例は1800年までおよんでいる。

Vの使用例も1800年まで見られる。ただ、この点に困難がある。センターで調査した本のうち、Londonで出版ないし印刷されたと表示されていて、本文折記号でVが用いられている1737年以降刊行された本が87件あるが、そのすべてがフランス語書籍であり、そのうちいくつかは実際の印刷地が大陸であるという指摘をすでにされているからである(例えばHenry Boulainvilliers, *Etat de la France, A Londres, Chez T. Wood & S. Palmer, 1737* は、Wellerのリストによれば、実際にはRouenで印刷されたとされている)。

これらの疑わしい例を除くとき、Londonで最後にVが使われた例は1731年まで遡ることになる。

ドイツで印刷ないし出版された本については、Sayceの観察とは異なり、もっと早い時期からUの使用例が見つかる。最も早いものは1626年にFrankfurtで印刷されている(ただし活字がuというよりはnを転倒させているように見える)。ここでも世紀ごとに調べると、16世紀25件ではすべてV、17世紀187件中Uが44件(24%)、Vが143件(76%)、18世紀850件中Uが758件(89%)、Vが92件(11%)であった。したがって、18世紀にはUを使うやり方のほうが一般的である。ただし、いずれのやり方も18世紀末まで見られる。

フランスで印刷ないし出版されたと表示されている本のうち、Parisで1568年に刊行された本でuが用いられていたが、本文中でもuとvが区別されていない。1661年におなじくParisでUが用いられている本がある。その他の例はすべて17世紀後半である(Paris 1761-1778年、Dijon 1765年)。

スイスの例は、Zurich 14件(1728年-1770年)、Basle 9件(1540年、1578年、1758年-1788年)、Geneve 2件(1599年、1615年)、Bern 1件(1772年)、Sankt Gallen 1件(1790年)であった。16世紀の3例と1615年の例が目を惹くが、いずれもラテン語書籍である。18世紀の例については、Zurich、Basle、Bern、Sankt Gallenはドイツ語圏に属すから、ドイツ語圏のやり方を踏襲しているものと考えられる。ただしBasleの18世紀の例には前述のTourneisenによる英語書4件と彼の兄Emanuel Tourneisenによるもの(ドイツ語書)2件が含まれる。これらは英語圏のやり方の反映であるかもしれない。

イタリアの例はむしろもっと早い時期のものである。Venice 6件(1518年-1616年)、Florence 1件(1521年)。Milanのもののみは1781年である。オランダの例はLeyden 1件(1556年)、The Hague 1件(1789年)、Amsterdam 2件(1715年、1764年)である。ただしThe Hagueで1789年に出版されたと表示されている[Restif de la Bretonne], *Le Thesmographe, ou, Idées d'un honnête-homme, sur un projet de reglement, proposé à toutes les nations de l'Europe, pour operer une reforme generale des loix, avec des notes historiques*, A La-Haie, Chés Gosse-Junior & Changuion, libraires des etats, et se-trouve à Paris, chés Maradan, libraire, 1789 は、Wellerのリストでは、実際の印刷地がParisとなっている。同様に、Amsterdamで1764年に出版されたと表示されている *The origin and progress of despotism in the oriental, and*



*other empires of Africa, Europe, and America*, [s.n.]は、HalkettとLaingの英語匿名書事典<sup>30</sup>によればNicolas Antoine Boulangerの作品をJohn Wilkesが翻訳したものであり、本当の出版地はLondonとされている。Amsterdamのもう1件J.G., *Essai-boek of uitgereekende tafelen van alle gehaltens in 't goudt en zilver gereduceert uit marken bruto, in marken fyn : beneffens de uitrekening van de waady van 't zelve, in guldens, stuivers en myten*, T'Amsterdam, Gedrukt voor den auteur ..., by Hendrik van Eyl ..., [s.n.] (1715年刊と推定されている)は図表が主であるが、Uだけではなく通常では折記号に用いられないWも使われている。

(一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)

---

<sup>30</sup> James Kennedy, W. A. Smith and A. F. Johnson, *Dictionary of anonymous and pseudonymous English literature* (Samuel Halkett and John Laing), new and enlarged edition, v. 4, Oliver and Boyd, 1928, p. 270.